

- 日 時：8月4日（日）聖霊降臨節 第9主日（平和聖日）
- 場 所：立川教会
- 説教題：説教題：「主において常に喜びなさい。」
- 聖 書：新約 フィリピの信徒への手紙4：1-9（p365）
- 讃美歌：24, 510「主よ、終わりまで」、499「平和の道具と」、65-1, 29

梅雨寒の日々が続いたのが嘘のように、梅雨明けと共に予想通り猛暑の日々となりました。皆様、お互いにくれぐれも健康に留意し、決して無理をせず、この夏を乗り切りたいと思います。

今日与えられた聖書の箇所は、喜びの手紙として知られるフィリピの信徒への手紙です。パウロがこの手紙を書いたその背景に心を向かわせる前に、日本基督教団が平和聖日と定めたこの日を覚え、さらに74回目の敗戦記念日を迎える来週と、2週続けて平和について一緒に考えたいと思います。又、私たちが所属する日本基督教団の成り立ちと歴史も振り返りたいと思います。

ところで、1868年の明治維新以降の日本の歴史は、今では信じられないのですが、ほぼ10年に一度の割合で戦争につぐ戦争の道を歩んで来ました。

まず1894年には中国との間で日清戦争を起し、10年後の1904年にはロシアとの間で日露戦争を起します。さらに10年後の1914年、第一次世界大戦が始まると間もなくこの戦争に参加しました。

その後軍備を拡張し続け、1931年からは満州事変＝日中戦争を起し、10年後の1941年には第二次世界大戦・アジア太平洋戦争を引き起こします。

つまり、1868年の明治維新から1945年の敗戦までの77年間に、5度の大きな戦争を起こしました。

これらの戦争によって犠牲となった人々の数ですが、特に第一次、第二次世界大戦です。私たちの想像をはるかに超える犠牲者を生み出します。第一次世界大戦では軍人・民間人合わせて900万、第二次世界大戦では、日本だけで310万、全世界では5,000万を超える人々が犠牲となりました。

敗戦から今年で、戦前とほぼ同じ年月である74年を迎えます。この74年の間、日本は一度も他国と戦火を交えたことはありません。理由は明らかです。日本国憲法第9条を護り続けたからです。

皆さんは、憲法9条の全文をご存知ですか。今日は特別な日なので、一度読み上げます。又、日本国憲法の前文も少しだけ読みたいと思います。

magari なりにも、平和国家としての歩み続けることの出来た、世界に類のない素晴らしい憲法であり、前文です。

初めに前文、次に憲法 9 条を読みます。

【日本国憲法前文】（一部）

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。

われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思う。

われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

【日本国憲法第 9 条】

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

② 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

私は思うのです。

日清戦争の勝利によって台湾を植民地とし、日露戦争の結果、朝鮮を植民地とし、さらに、日中戦争によって中国を武力で侵略した過去を持つ私たちは、どのような理由があっても憲法 9 条を手放してはならないと思います。何故なら、憲法 9 条を変え、戦争の出来る国にしたその瞬間から、日本はこれまでの平和外交の道を捨て、戦前のように力に頼む外交へと後戻りするのが明らかだからです。

一昨年 12 月、友人の A 先生の案内で、北京を訪れました。市内にある戦争博物館を見学した時のことです。展示されている日本軍の残虐行為を記録した写真を正視することが出来ませんでした。韓国でも同じです。植民地下、日本からの独立を志した人々が捕らわれ、収監されたソウル市内の西大門刑務所を見学した時のことです。日本の軍隊や警察が彼らに何をしたか、実際の現場を再現した独房や取調室を見て、想像するだけでもその場にいたたかれませんでした。

聖書に記されているイエス様の御言葉ですが、平和を愛する者は幸いであるとは書いてありません。愛するのではなく、つくり出す（口語訳）、実現する（新共同訳）と書いてあります。愛すると言うのは、つくり出すのに比べ、どちらかと言えば受け身のように思えます。平和が来たら良いと願う状態です。しかし、平和をつくり出すとは、自分が汗をかいて、この手で平和を手繰り寄せることを意味しています。平和をつくり出すために汗をかくの

です。労するのです。自分に出来る行動を起こすのです。そうした者こそ、神の子と呼ばれ
るとイエス様は言っておられます。

平和とは、もちろん、戦争が無い状態だけを意味するものではありません。
何よりもまず、自分の心の内に、平和をつくり出さなければなりません。
自分と異なった考えを持ち、行動する他者に敵対するのではなく、和らぐのです。
その考えを尊重し、受け入れるのです。
しかし、私にとって、一番難しいことかも知れません。
そのためには、他者の、それでも一番素晴らしい点を見つけ出すことです。
そうすれば、自ずと、和らぎ、受け入れることが出来る、そう思います。

今日与えられた聖書の御言葉とも深く関わります。
第4章1節です。

1：だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する
人たち、このように主によってしっかり立ちなさい。

現在のバルカン半島に位置していたマケドニアのフィリピの教会は、パウロの第2回目
の伝道旅行の最初に出来た教会でした。紀元54年から56年とされています。
ところが、この教会では問題が起きていました。
2節です。

2：わたしはエボディアに勧め、またシンティケに勧めます。主において同じ思いを抱き
なさい。

つまり、ここで登場しているエボディアとシンティケです。この二人の女性は、パウロが
フィリピの教会を作った時、彼を助け、教会を指導した有力なメンバーでした。しかし、今
や、二人は仲たがいをし争い、パウロを心配させるに至っていました。ですから3節で
す。

3：なお、真実の協力者よ、あなたにもお願いします。この二人の婦人を支えてあげてく
ださい。二人は、命の書に名を記されているクレメンスや他の協力者たちと力を合わせ
て、福音のためにわたしと共に戦ってくれたのです。

かつて、パウロの教会建設を助け、パウロと共に労苦した女性たちです。この二人が争っ
ているのを耳にしたパウロの心の痛みはどれほどであったかと思うのです。パウロは、この

二人の女性の名をあえて挙げ、教会のメンバーに二人を和解させるための努力を願うのです。そしてパウロは、争う二人が和解するために必要なことを示します。それは、4節です。

4：主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。

主において常に喜ぶ。この言葉は、キリストに出会った時のその思いに立ち帰れと言うことを意味しています。キリストの愛を知ったその時に立ち帰れと言うことです。

私たちが初めてキリストの愛を知った時、そして洗礼を受けることを決意した時、どれほどの喜びと感謝があったでしょうか。その事を思い起こし、その時の喜びを再びよみがえらせよと言うのです。

私が洗礼を受けたのは14歳でした。

私の人生の中で、家族5人が最も厳しい試練に直面した時でした。

私自身も心が荒んでいるその只中で、私は洗礼へと導かれました。

キリストに出会った時の初めの愛に立ち帰り、その喜びの内に生きなさいとの勧めです。そして、その愛の内になさいと言うのです。

キリストの愛に包まれている自分を常に見出しなさいと言うのです。

その時、5節です。キリストの愛に包まれて生きる時、

5：あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。

広い心、即ち、自分と意見の異なった他者、それだけではなく、自分を攻撃する者をも広い心で受け入れることが出来るのです。その時です、

6：どんなことでも思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。

思い煩いの心は消え、全てを御手に委ね、日々感謝の内に生きることが出来るのです。7節です。

7：そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

神の平和が私たちの心の内に満ち、私たちの歩みは、主イエス・キリストによって導かれたものとなります。神の平和が心を満たし、主イエス・キリストによって導かれた歩みは、

8節です。

8：終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。

その歩みは、主に在る真実、気高さ、正しさ、清さ、愛、名誉、徳、そして称賛を心に留める歩みとなります。

最後です。パウロは、愛すべきフィリピの人々に次のように命じます。9節です。

9：わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。

パウロが命じたことは、イエス様の教えです。

イエス様が教えられたことを実行する時、神様が私たちと共におられると述べ、ひとまず筆を置きます。

平和聖日の朝、私たちに与えられたこの御言葉は、イエス様が山上で語られた「平和をつくり出す者は幸いである。彼らは神の子と呼ばれる」と言われた言葉を、パウロの言葉で言い表したものです。

この世界に平和をつくり出す者となるためにも、私たちが、まず自分の心の内に、そして互いの心の内に、確かな平和をつくり出す者となろうではありませんか。

祈りましょう。